

## 退学を考えた学生に一言

金井 健

長野救命医療専門学校 救急救命士学科

### はじめに

そもそも、専門学校とは専修学校制度において高等学校卒業者に専門的知識と技術を施す教育機関である。昨年からは専門職大学制度が始まり、専門学校の重要性はますます深まっている。そのような時代を迎えている今日、高度な知識、豊かな人間性を育成しようする専門学校においても幾つかの課題がある。その一つに「退学」という問題がある。これまで、学費や学力、そして人間関係等が問題と考えられていた退学者については、部分的には改善されつつある。学費においては国等からの支援が強化された。しかし、学力や「いじめ」等においては必ずしも効果的な改善策が確立されている訳ではない。ゆとり教育は学力の低下をもたらしたとされているが実際はどうなのか。また、「いじめ」の問題は今日の教育現場における最大の難問である。本年10月には、教師による「いじめ」や、「いじめ」が原因とされる中学生の「自殺」等について報道されていた。学生達は心の中で何を思ったのだろう。学校組織の杜撰な対応に、安心して学校へ通えないと深刻に訴える保護者の思いがそこに見えるような気がする。今後「退学」という問題に対して、どのような方法で原因を突き止め、どのように対処していくべきか。学校教育については、学校組織全体で取り組むべき課題である。学力低下や不登校、そして、「いじめ」や規則を守れない等の原因と責任は学校にあるのか。それとも家庭、はたまた社会環境なのか議論は高まる一方である。少子化が今後の専門学校にもたらす課題は山積している。自分の将来を思い描い

て入学はしたものの、毎年「退学」する学生がいることは誠に遺憾であり由々しき問題である。「勉強のできる子供に育ってほしい。」と願うは、どこの保護者にしても共通の願いだ。まして「退学」は最悪のシナリオである。不可能を可能ならしめるためのシステムは如何にあるべきか。今回は、救急救命士学科の学生に対する提案と効果的な授業づくり。そして、「いじめ」と「甘やかし」について考えてみたい。

### 1 学生への提案

退学についてあるが、教育機関（高等学校、大学、専門学校）等では、退学という残念な結果となる学生がいる。病気や学業不振による退学、人間関係、学費等、原因は様々である。その中で毎年、学業不振を理由として退学する学生がいる。彼等は救急救命士を目指し、真剣に努力をしたのだろうか。本当に学業不振が退学の原因なのだろうか。

確かに入学する学生の中には、救急救命士や救急隊員（消防職員）についての職業理解が少々曖昧な学生も少なくない。人は誰でも大人になったら「あんな職業に」、「こんな人間に」なりたいといった夢や希望がある。救急救命士学科の学生は、救急救命士の資格を取得したい。救急隊員として働きたいとの思いで入学した筈である。しかし、実際に授業が始まると、勉強が難しい、実習がきつい、人間関係が上手くいかない等の問題で悩んでいる学生を見受ける。進路変更を考慮しての退学であればそれも仕方がないだろう。しかし、学習や、いわゆる「いじめ」的な理由を原因とするならば甚だ残念な事である。「いじめ」は現在大きな

社会問題となっている。

学生は「退学」する前にちょっと立ち止まり、今日までの学校生活を振り返って欲しい。怠学はしていないか。足跡は目標に向かっていたか。目的を見失っていないか。学校を諦める前に、もう少し頑張ってみようという自助努力はしたのだろうか。入学して1ヶ月で退学を決めてしまう学生もいる。

確かに、専門学校の勉強は専門の職業に特化した授業であり、救急救命士を目指すための勉強、消防職員を目指すための勉強は難しいかも知れない。実習授業も沢山ありハードルは高いと思う。専門科目は新しい分野の学問であり、人の命を守る救急救命士を目指すのであれば必須である。公務員を目指すのであれば基礎科目は習得しなければならない勉強であり、容易ではないというのも良く分かる。

しかし私は、自分の夢や希望を達成するための勉強ならば、多少の困難はあっても遣り抜く覚悟があって当然だと思っている。学習は毎日の習慣、人間関係はお互いに価値観を同じくする。目的を持って専門学校に入学したならば、それ相当の苦難は覚悟すべきである。

そこで、一言提案したい。目的達成の方法として、これからの中学校生活における「設計図」を書いてみてはどうだろうか。自分はこれから「今何をしなければならないか。(目標)」「どんな人生を歩みたいのか。(目的)」をはっきりと設計図に記してみよう。そのことによって目的意識を喚起し、夢や希望へのタイムテーブルに沿った学校生活が可能になるかも知れない。これから「どんな職業」に就き、「どんな人間」になりたいかという目標や目的をしっかりと「活字」にすることだ。人の一生は大まかに3つの工程があるのではないだろうか。それは「構想力」「設計力」「実行力」である。構想力は実現しようとする物事を考えの中で組み立てる能力である。設計力は思い描いた「夢」や「希望」などを叶えるための道筋を描いた図面であり、

実行力は目的に向かって行動を起こすことである。

例えば救急隊員を目指すのであれば公務員に合格するための準備をどのようにすべきか。立案したら計画に従って行動を起こすことになる。目標は目的達成のための足掛かりであり、目的は将来の自分自身である。目的なくして実行を進めることはできないし、目的達成のためには一つ一つ石垣を築くが如く地道な努力は欠かせない。現在の設計図(例えば救急救命士)、そして将来の設計図(例えば救急隊員)があるとするならば、その設計図に沿った生き方をしなければ目的を達成することは難しい。すなわち、人生の「みちしるべ」が必要となるのである。

設計図といつても、建築家が設計するような繊細なものではない。将来の自分を想像しながら、「今は何をすべきか。」「その先をどのように進むべきか。」の「道標」である。目標や目的を毎日「見る、聞く、話す」ことを繰り返しているうちに「やる気」や「本気」といった「学習意欲」が湧いてくるかも知れない。勉強は何よりも「難問」「疑問」に対し積極的に立ち向かう姿勢と興味を持つことが重要だ。いわゆる「やりっぱなし」はしないことである。分からることは直ぐに調べる。調べて分からることは人に力を借りる等の方法を用いて正解へと導く能力を習得するのである。難問から逃げ出さることは、これから的人生において重要な要素と考える。最初は手間暇もかかるだろう。しかし、このような手順を日常的に繰り返すことが肝心だ。毎朝新聞を読む。水は絶えず動いていれば氷らないのと同じである。目標や目的を達成するための「近道はない」というのが結論になる。苦労して覚えた知識は忘れ難いし、何といっても「達成感」だろう。簡単な設計図を毎日の学校生活や日常生活で履行してさえいれば、勉強や実習に対する学習意欲が湧いてくるのではないか。学校で学習したことをしっかりと定着させるためには、家庭での学習が不可欠とされる。学力の向上は、学習量と学習の質が重要であり、テレビを

見ながら、音楽を聴きながら、といった学習は効果が薄いようである。レベルアップの鍵は何といっても集中力とされている。学力向上に向けた対策は幾つかあると思うが、一度に全てを実行しようとしても無理がある。やれるところから改善していくことが必要だ。

消防職員になるために、救急救命士国家試験に合格するために頑張っている学生は沢山いる。本校の学生も、その困難に立ち向かって乗り抜こうとする気持ちを大切にして欲しい。自分の夢を叶えたいと思うなら、難しい勉強もそんなに苦しい事とは思わない。

何故ならば、行動を起こすには、「やる気」が前提となるからだ。学力を向上させるための方法として勉強の「習慣化」は必要だ。勉強時間を増やすだけでは学力の向上は望めない。「やらされている」のではなく「設計図」に基づいて自発的に勉強することや、苦労して解答を導き出したという達成感を感じることは必ず学力の向上に繋がると考える。つまり、予習・復習の習慣、いわゆる「やる気」である。毎日テキストを開く習慣は絶対に必要だ。そこで、学生にお願いしたい事は、受動的な学習から能動的な学習に意識を変革する事である。即ち勉強しようとする「気持ち」が学習意欲を向上させ、結局は目的達成のための架け橋となるからだ。勉強は何故必要か。勉強が得意になる方法は何か。それぞれの理由を考えながら、根拠に基づく方法を採用していくことが必要ではないだろうか。

小学校1年生の作文に「おおきくなったら、レスキューたいいんになりたい。」(原文)と新聞に書いた小学生が、その「夢」に向かって本校に入学したのは2015年4月のことである。授業に臨む姿勢は誠に誠実にして真剣そのものであり、すべてにおいて他の模範であった。公務員、国家試験に合格し現在は消防職員として活躍している。夢を叶えようとする強靭な精神力が、幼い頃からの夢を成し得た結果ではないだろうか。毎朝早く登

校し、自発的に校内の「清掃」を終えてから「体力練成」「教室での自習」を日課としていた学生がいた。成績は上位ではあったがトップではない。しかし、卒業年次にはトップとなった。「日々努力する。」「授業を大切にする。」「継続する。」という当たり前の行動が如何に大切かということを経験した。

このことは教員による指導ではない。本人の「やる気」が残した結果である。

チアリーディング世界大会「ザ・サミット2019」で世界2位となった上田エンジェルスのヘッドコーチは「決してあきらめない気持」で決勝に臨んだと話している。これらはいずれも強い憧れへの挑戦や、日々の厳しい練習と強い精神主義的な力が成果を収めたものと考える。

長野救命医療専門学校のアドミッションポリシーには、救急救命士に対して、深い関心を持ち、将来、取得した国家資格を活かした職業に就くことを目標としている者。目標に向かって自発的、意欲的に学習に取り組もうとする姿勢のある者となっている。

よって私は、問題を解決するための条件として、強い「憧れ」、確かな「設計図」、そして旺盛な「実行力」、併せて「やる気」と「努力」をもって確実に遂行すれば、必ず学業不振を改善することができると言える。

## 2 面白い授業の試み

学力低下の原因として、「ゆとり教育」やゲーム、スマートフォンが対象になることが多いとされているが、本当に「ゆとり教育」やゲームだけの問題で済ませて良いのだろうか。

確かに、「ゆとり教育」が実施されてから「読み・書き・計算」といった基礎学力は、平均点や順位が低下し、考える力も低下したという結果が発表されている。スマートフォンやゲームもその原因の一つになり得るかも知れない。

しかし私は、学力低下の原因が、「ゆとり教育」や、学生側だけの問題とは思えない。授業に対する私自身の技量不足も原因として指摘されること

にはなるだろう。そこで、分かりやすい授業の組み立てが必要だ。授業が楽しければ学習意欲の高揚にも繋がるだろう。体験談は想像力を刺激し、本物を手に取ることは興味を奮起させる。視聴覚器等を刺激するあらゆる手段を駆使して、学生達が「わかる授業」と感じる授業展開を進めることができ私の課題である。基礎的・基本的な「知識や技術」に加えて「学ぶ意欲」を育てることが大切な要素であると考える。

現在の学生達は、学ぶ意欲や判断力、表現力に課題があると指摘されているようだが、「わかる授業」、「面白い授業」を目指す対策として次のことを実行しようと思う。

一つ目は、良好な「コミュニケーション」である。「コミュニケーション」は情報の伝達、連絡、通信の意だけではなく、意思の疎通、心の通り合いという意でも使われる（出典：小学館デジタル大辞泉）。一般的にクラス内のコミュニケーションが悪いと良い結果は期待できない。それは、学生間における内面的なことを理解できていない学生、教員を理解していない学生、学生を理解していない教員という欠点があるからではないか。入学してすぐには難しい問題だ。出来るだけ早期改善を取り組むべき課題と考える。コミュニケーションを上手に図ろうとするならば、そのスタートは「相手への興味と感心」ではないだろうか。興味と感心を持ってコミュニケーションを図れば、自ずと相手も好印象を持ってくれるに違いない。話す態度や雰囲気なども大いに関係するだろう。ポイントは、明るい雰囲気、目を見て話す、話しやすい印象を意識する等が考えられる。さわやかな笑顔や挨拶、ちょっと面白い言葉を交えた学習などによって、教員と学生同士がお互いに知覚や感情、そして思考の伝達がスムーズにできるような授業づくりをしたいと考える。

二つ目は、人間関係の改善である。あくまでも、人間関係は個人対個人が基本である。社会や集団において、人ととの付合いは最も大切だ。基本

的には「意思の疎通」である。価値観の違いが、考え方や意見の食い違いを招くことになる。相手の価値観を尊重してコミュニケーションを取れるようになれば、人間関係は改善するかも知れない。学生達は社会の一員として物事に対して理性を失わないことである。理性とは、善悪を識別する能力（出典：小学館デジタル大辞泉）となっている。グループ学習では自分の意見を話す。相手の意見を聞く。全員が1つの課題に対して、直接的に意見交換のできる場所である。それは相手の考え方や性格などをある程度把握できる絶好の機会でもある。まず、自分を知ってもらう。そして、相手の考え方や性格などを知る。教員や学生同士がお互いに相手を「知る」「思い遣る」「尊重する」という心の交流を図ることによって、良好な人間関係の構築が期待できるのではないか。「水魚の交わり」である。ローテーションは頻回に行い、小さなグループからクラス全体へと広げて行く授業形態を作っていく。但し、グループ化は注意が必要だ。失敗をするとクラス内に派閥の生じる危険性もある。派閥は「いじめ」の原因となりかねない要素であり、コミュニティを悪化させる原因とも言われている。

三つ目は、フリーカードの活用である。授業に対する学生達の率直な意見や要望を直接聞くための手段としてフリーカードの活用を試みたい。授業の最後5分間程度で、授業に対する不満や良かった事、あるいは疑問点など、自分の「言いたい事」を「好きなように」書いてもらう。そのことによって、普段、教員に言えない事や相談したい事、また、クラス内の状況をある程度は知ることが出来るかも知れない。そして、その内容を精査し、特に緊急、あるいは重要と考える点については次の授業に反映させる。そのことによって、教員から学ぶ事、学生から学ぶ事、友から学ぶ事があるのではないか。また、縦と横の関係を緊密にすることで学生同士の学習意欲向上が期待出来るかも知れない。それ自体がすでにコミュニケーション作

りの一歩であると考える。教員の言い分、学生の言い分を記録に残すことは、今後における授業づくりの根拠になると考える。

スムーズな人間関係は、コミュニケーションも自然に良い方向へと進むと考える。学生の本音を活字として記録することは、教員と学生の考え方を共有することになる。情報の共有は今後の授業づくりの参考になると考えるからだ。

よって私は、良いチーム作りは、良い集団行動に繋がる。良好な人間関係は理想の学生集団に繋がる。学生の貴重な意見は今後の授業改革の資料として学習環境を整える参考になる。これらの要件を整えることによって、学生に「わかる授業」「面白い授業」を提供できる可能性があると考える。

### 3 いじめと進路変更

学校や一般社会は、いわゆる集団という形式で成り立っている。集団生活においては「いじめ」という複雑極まりない難問が生じることはしばしばあるのだが、何故、「いじめ」という問題が起こるのだろうか。人はそれぞれに考えをもって行動している。試験の点数化は容易でも、心の点数化は困難である。それは、心の中まで透視化することはできないからだ。人の心を推し測ることは可能でも、心の内を客観的に覗き見る方法は無いということかも知れない。

最近、教員の不祥事が頻繁に報道されている。学校は見て見ぬ振りをしていたと、社会から指摘されても仕方のない事例である。憂慮すべきは教員間のコミュニケーション不足について指摘されていた事である。

確かに、人はそれぞれの環境で育ち、それぞれの生き方をして現在がある。食べ物にも好き嫌いがあるように、考え方や行動、人の好き嫌いはあって当然の事かもしれない。従って、意見の食い違いが生じるのも良く分かる。

しかし私は、「いじめ」は、個人対複数の関係にあり、個人に対して集団で相対することは良くない事であると考える。弱い立場の人間を複数で肉

体的、精神的に苦しめることは非人道的な行為である。自分がいじめられる事を想像してみた事はあるだろうか。そして、どんな事を思うだろう。自分のやりたい事、言いたい事を押し付けることは結果として、お互いの悪循環となってしまう。被害者も加害者もお互いに相手を思い遣る気持がなければ、何時しかトラブルも発生するだろう。結果として両者が被害者にも加害者にもなり得る可能性は否定できない。

「いじめ」は見えない部分で発生しているのが現実だ。退学の意思を示した時点で「いじめ」が発覚する場合も多い。実際に「いじめ」によると思われる退学者を何人か経験した。内容は言葉の暴力や無視、陰湿ないたずらなどである。特に多いのが御体に関する誹謗中傷だ。また、「暴力」も散發している。「いじめ」や「暴力」は徹底的に対処すべきであると考える。

何故ならば、「いじめ」や「暴力」は、その人の人権を無視した卑劣な行為であり、「いじめ」は、その人の人生を変えてしまうかも知れない重大な行為だからだ。

よって私は、「いじめ」は、被害者にも加害者に原因があると考える。「いじめ」の早期発見、早期対策は可能なのか。効果的な打開策はあるだろうかと模索の日々である。しかし、この問題に対する特効薬的な対処方法は今のところ見出せてはいない。現在の「いじめ」対策として、教員の経験則は否定されていると専門家は発言していた。「いじめ」という出口の見えない問題は、学校だけでは解決できない。スクールカウンセラーによる専門的な指導を頂きながら、職員や学生、保護者が団結して取り組む最優先の課題である。人間関係を原因として、退学の意思表示をした学生が卒業した事例は未だ経験していない。

一方、「進路変更」による退学はまだ勉強を諦めた結果ではないと考えられる。入学してから1週間程で「進路変更」を考え始めた学生がいた。理由は看護学校への進学である。その時、慰留の話は

せずに黙って本人の話に傾聴した。それから間もなく、学園に桜が綻び始めたある朝、「この学校で頑張ってみます。」との一言があった。卒業アルバムの寄せ書きには「辞めなくて良かったです。このまま突っ走ります。」(原文)と記されている。卒業して早6年。元気で職務に頑張っているとの便りも届くが、これは成功の一例に過ぎない。今年も「いじめ」が原因と思われる学生がすでに退学している。

#### 4 優しさと厳しさ

優しい教員は学生にとって良い教員である。うるさい教員は良くない教員だと良く聞くが本当にそうだろうか。

確かに、あの教員は煩く注意しないから好きだ。あの教員は優しいから大丈夫だ。等と学生の会話を聞くことがある。授業中の態度や雑談、遅刻等についても注意しない教員は学生側から見ると良い教員かも知れない。

しかし私は、教員は学校においては「親」であり、僕の指導は仕事の範疇と考える。学生と仲が良い、優しいだけが良い教員とは思わない。

電車の中、車の運転中や歩きながらのスマートフォン。最近は当たり前の光景である。電車の背もたれに寄りかかりスマートフォンを見つめている。その姿勢が、そのまま授業中に多々見受けられる最近の授業風景だ。新聞によると、情報通信機器使用についての調査結果が報道された。スマートフォンやゲームを止められないと感じている人は7%、中々止められない人は40%以上というアンケート結果であった。「ゲーム障害」は世界保健機関(WHO)が2019年5月、治療が必要な依存症の一つに認定している。1日7時間から8時間は当たり前のような。従って、勉強時間や睡眠時間は極端に減っていることになる。

授業中、朝から居眠りをする学生が多くなったことや、学力の低下はその証ではないかと推測される。このような状態を家庭や学校そして社会は黙って見過ごしても良いのだろうか。今、目前に

起きている事象の善悪を指導できるのは学校においては、今、その場にいる教員や学生だ。学生を本当に大切に思うなら、学生の将来を考えて正しい方向に導こうとするのが優しい教員ではないだろうか。見て見ぬ振りは甘やかしに他ならないのではないか。教員はその先頭に立ち、善惡の模範を示すべきだと考える。

何故ならば、甘やかしは、自立心が育たず、感謝の出来ない人。人から指示されないと動けない受け身の性格になると言われているからだ。

2020年の夏はスポーツの祭典、東京オリンピックが開催される。日本代表を目指して日々鎧を削るアスリートの言葉が耳に残った。トレーニングをするのは当たり前、更に重要な事は十分に休むことだという。適切な睡眠や食事を大切にして休養を取ることが向上の鍵となるらしい。良い休養を妨げる悪習慣として、短い睡眠、寝る前のスマートフォン、寝だめの3項目と記憶している。

僕は家庭か、それとも学校か。指示を守らない、挨拶や身の回りの整理整頓も出来ない学生が多いことに憂いを感じている。教員の見て見ぬふりは、学生の「甘やかし」に繋がるのではないか。教員と学生が仲良しであればそれで良いのだろうか。「甘やかし」は学習や集団行動に悪影響を与える大きなリスクと考える。良いことは大いに褒め、悪いことは厳しく叱ってくれる教員が私の教員像だった。「飴」と「鞭」かも知れない。然るに現在はどうだろう。自由奔放な学校生活をしている学生も少なくない。学生としての本分を全うしない時には厳しく「叱る」という指導も必要ではないだろうか。しかし、最近の指導では「怒らない指導」が効果的であるとの意見もある。規則が守れない、頻繁な遅刻や早退、無断欠席は社会で通用するのか。そのこと自体が学習意欲の欠如している証である。このままでは、確かな知識と技術、豊かな人間性を持った学生の育成には問題が残りそうだ。真剣に学ぼうとする学生にとって不利益となる行為を見過ごすことは容認できない。授業中の居眠

りや私語雑談、そして飲食する学生もみられる。最近ではクラスの3分の1以上が欠席する授業も見受けられるようになった。このような環境において、学力の向上は期待できるのか。これらの行為を改めない限り授業に参加する資格はないし心得るべきである。教員も学生もお互いに理性を持った行動が必要だ。「叱る」時は、しっかりと注意してやることが、その学生に対して本当の優しさを伝える教育ではないだろうか。褒めることと、甘やかすことは全く別のことであり、見て見ぬふりは論外と言わざるを得ないと考える。草や木は、寒さが厳しければ厳しい程、美しい花を咲かせ、大きな実を付けると聞いた。環境を整えることが大切である。

よって私は、是非主義をもって正しく指導することは教員として当然の責務であると考える。ただ、その実施方法については慎重に対処すべきは当然のことである。

将来の目的を明確にすることや、授業が面白くなることは、学習意欲や精神力を強く、長く維持することに繋がる根拠となり得る。また、学生同士がお互いに相手を思い遣る心を持って学校生活を過ごすことができるなら、良好な人間関係、すなわち「いじめ」のない学生集団の構築に繋がるものと考える。教員のやるべき事、学生のやるべき事を両者が自覚をもって切磋琢磨してこそ、甘えのない理想の学園生活が実現できるのではないかだろうか。

#### おわりに

あくまでも理想は、「学習意欲の向上」と、「心の通う学生集団」である。それを可能ならしめるための条件は、未来の自分をしっかりと心に描くこと。目的に向かって確実に歩んで行くことである。それは、お互いに相手を「思い遣る心」「尊重する心」から始まるのではないだろうか。同じ「志」をしっかりと胸に刻んで学校生活を謳歌することはできないのか。我々に出来ることは一体何なのか。

困難に遭遇した時こそ最も大切なことは、夢を諦めない強い気持と行動だ。「設計図」や「授業づくり」は問題を解決するための一つの方法に過ぎないかも知れない。しかし、このような各種の難問に対して教員や当事者だけでの解決には限界もある。特に「いじめ」重要な課題である。

偉人の中には、紆余曲折を経て成功を勝ち取った人生も沢山あると聞いた。レールに沿った人生が、必ず幸せな人生になるかと問われれば疑問も残る。それぞれの価値観に委ねたい。

人は生まれ出する時、たくさんの夢をその小さな手のひらに握りしめていると聞いた。

小さい頃から絵を描いていたその女性は、エンドロールに自分の名が載ることを夢見ていたという。アルバイトで学費を稼ぎ、専門学校でアニメを学び、憧れの京都アニメーションに入社した一人の女性。放火という卑劣な手段により犠牲となった。夢をもち、諦めず、苦学の末に実を結んだ娘の努力を両親は称えたという。目的を必死で勝ち取った女性の一人だったことを新聞から知った。イギリス映画「風をつかまえた少年」から、貧しい環境にあっても、目的に向かって遺り抜いた崇高な精神に感動した。「一意専心」である。

同じ「志」をもつ本校在学生には、現在の目標、未来の目的を「設計図」に描きながら「心の通う学生集団」、「充実した学校生活」を過ごして欲しいと願わずにはいられない。そして、「やればできる」という言葉が「やればできた」という結果を残し、憧れの職場へと巣立ってくれることを切に願ってやまない。

#### 文献

- [1] 小学館デジタル大辞泉
- [2] 信濃毎日新聞

受理日：2020年3月17日